雑司ヶ谷研究 3

――「緑のこみちの会」の活動と参加住民の意識――

Zoshigaya Study 3
"Midori no Komichi-no-Kai": Members' Consciousness and Activities

住居学科　薬袋　奈美子　田村　有希　泉水　花奈子
Dept. of Housing and Architecture　Namiko Minai　Yuki Tamura　Hanako Sensui

抄　　録　雑司ヶ谷は木造密集市街地で地震の際には最も危険な地域の一つとされている。1980 年代から改善への取り組みが行われてきた。その中でも特筆すべきは，雑司ヶ谷霊園周辺の万年塀の改修である。今は生垣や花壇があり，地元の住民がボランティアで手入れをしている。本稿では，この雑司ヶ谷霊園の生垣整備とその後の手入れについて振り返り，整備にかかわった専門家や住民からのヒアリングやアンケート調査で知りえた事柄を中心に整理した。その結果 10 年以上にわたって，生垣手入れのボランティア活動が継続されえてきた背景には，運営へのサポートを業政から得ながら，参加者がその時々の状況に応じたやりがいを見出してきたという点があることがわかった。

キーワード：生垣，防災，豊島区，コミュニティ住環境

Abstract　Zoshigaya is designated as one of the most dangerous zones in earthquakes because of the density of wooden houses. Improvement activities started in the 1980s. One of the significant results is the renovated concrete wall around Zoshigaya Cemetry. It is now bordered by hedges with lovely flowers. Local residents are taking care of these hedges and flowers on a volunteer basis. This paper surveys the history of improvement and residents' activities related to the Zoshigaya Cemetery hedges. This study is based on interviews of and questionnaires for residents, as well as professionals involved in the improvement and maintenance of the hedges. We found that residents' monthly activities continued for 10 years because the residents enjoyed participating and were supported by government foundations and so on.

Keywords : hedge, disaster prevention, Toshima Ward, community, residential environment

1. はじめに

1.1　背景

都市部の木造密集市街地の防災対策での住民の主体性の重要性が言われて久しいが，その手法が十分に確立したとは言えない。本稿は，防災対策として実施された雑司ヶ谷霊園の生垣整備の経緯とその後の管理活動を取り上げ，住民の係る防災と住環境向上方法の確立に寄与するものである。

日本の住宅地の住環境整備は，道路をはじめとした生活に必要な都市基盤整備は行政が行うものであるが，生活の質を左右する住宅地としての景観を創り出す，各住宅のデザインや外構は住民の自発性に任される。また住宅だけではなく，行政によりつくられた街路や公園等の公共施設内の緑の管理でも周辺住民による寄与が大きいものの継続的な管理活動への住民参加は期待しにくい。一方で，200 ～ 250 m の生活圏域内の緑地であれば，管理への参加意欲が高いこと[7]や，計画策定段階で住民参加がある公園は完成後 10 年を経過しても管理意識が高いこと[8]が既に示されている。しかし，継続的な活動維持のための具体的方法についての検証は，十分に行

われていない。防災対策としての緑化への住民の継続的な取り組みは，防災対策効果を高めるためにも欠かせない。その方法を確立することは急務である。

本稿では，こういった公共的な空間へのボランタリーな住民組織の関わりが，どのように継続的に存在し続け得るのかを探るために，雑司ヶ谷霊園にかかわる住民団体の考察を行う。特に参加している住民の継続的活動の背景にある一連の活動に対する認識を確かめる。なお本研究は雑司ヶ谷という地域を，住環境という視点から多角的に考察をする一連の研究の一つとしても位置付けるものである。

1.2　研究の方法

本研究では，まず雑司ヶ谷の防災の視点からの住環境整備の経緯についてまとめる。その中でも初期に取り組んだ雑司ヶ谷霊園の周りのコンクリート塀を生垣に変えた経緯について整理する。防災対策を始めた当初から専門家として係っている専門家へのインタビュー及び，諸行政資料等から整理する。その上で，整備された霊園周辺の生垣手入れを行う「緑のこみちの会」についての考察を行う。行政資料の他，設立当初から会の実質的な活動に継続的に参加し，リーダー的立場にある会員２名，及び雑司ヶ谷地域の防災まちづくりに継続的に係っている専門家＊1へのインタビュー（2011 年 11 月）をもとに整理をする。更に 2011 年 12 月に，現在参加しているメンバーに対して，活動への参加意識等についてアンケート調査を行い，考察した。

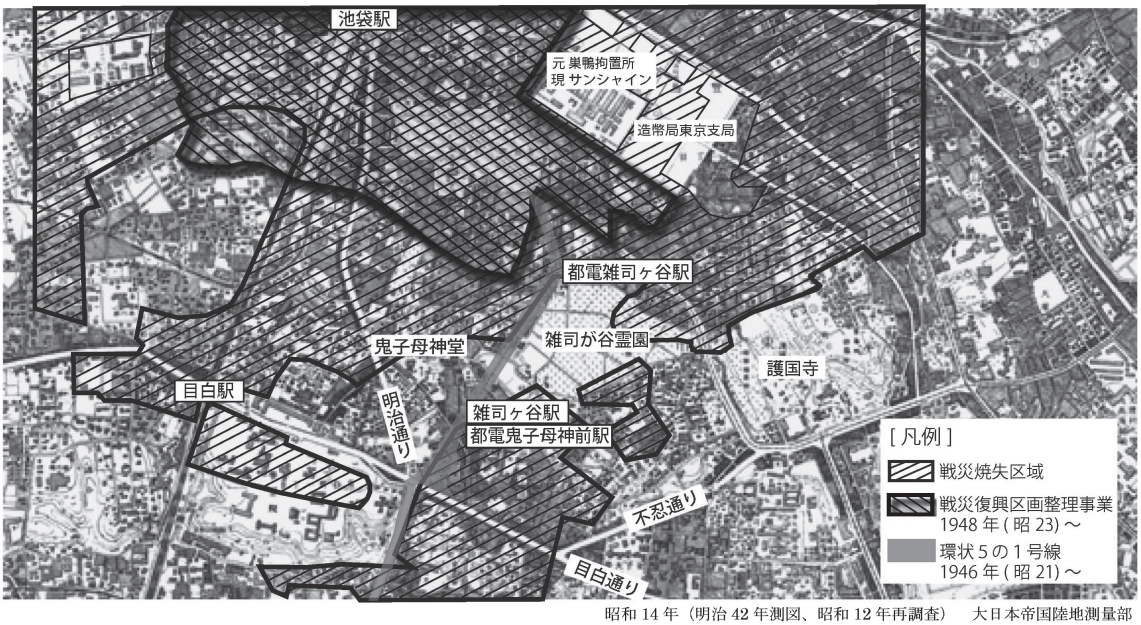
2.　雑司ヶ谷地域の都市整備と雑司ヶ谷霊園の位置づけ

2.1　都市整備の歴史

1）戦後の地域の開発の概況

雑司ヶ谷地域では，810 年に法明寺が開山した。室町時代には，応仁の乱を逃れてきた３氏が住み始めたとは言われるものの，江戸時代の江戸名所絵図に紹介される通り，護国寺や鬼子母神堂参りで近辺を通る人はいても，田畑が中心の江戸の郊外行楽地という位置づけであった。しかし大正から昭和初期にかけて，関東大震災の難を逃れた住民がこの地域に住み始め，田畑が住宅地に転用されていった。当時の建築基準に基づいた狭い道路幅員の住宅が多く見られるのは，この時の名残でもある。雑司ヶ谷地域の公共交通機関の一つである都電荒川線が開通したのは，1925 年である。住宅地としての便の良さが高まるきっかけでもあった。

第二次世界大戦でこの地域は，焼け野原となる（図 1）。地元住民の中には鬼子母神が地域を守って



昭和 14 年（明治 42 年測図、昭和 12 年再調査）　大日本帝国陸地測量部

図 1　雑司ヶ谷周辺の戦災と面的整備＊2

くれたという人もいるように，雑司ヶ谷の中でも霊園と鬼子母神堂周辺は焼け残ったものの，現在の南池袋方面及び雑司ヶ谷 2 丁目は焼失した。全国の戦災都市は，戦災復興計画に基づいて，幹線道路の整備と土地区画整理を主とした復興を進めた。雑司ヶ谷近辺でも池袋駅前周辺は土地区画整理事業が大々的に展開し，昭和 35 年までをかけて行われ，雑司ヶ谷地域の北端部は，近代的な住宅・商業地を展開しうる都市基盤が整った。しかし都電荒川線に沿って計画をされていた環状道路 5 － 1 号線は，近年になって漸く事業が進み始めた。

また，マストランジットとして地下鉄副都心線が 2008 年に開通した。都電荒川線の鬼子母神駅との乗換可能駅として開設されたもので，利便性向上による居住人口の増加が見込まれる。

雑司ヶ谷全体としては，戦後の復興期に従前の敷地にそのまま建設されたものが多く，現在にいたる木造密集市街地を形作ることとなった。戦災の焼け跡に建てられた住宅は，現行の建築基準法では接道基準等を満たさず既存不適格であり，狭小敷地が多い中では各人の努力での解決には限界がある。しかし既に建て込んだ地区での，面的整備は困難であり，広場や井戸の整備，個別住宅の不燃化等を含む事業地域を指定した中での点的整備を中心に行ってきた。

その一方で既存のストックを改善・活用するための取り組みが見られるようになる。例えば最近では，区が設置した「雑司ヶ谷・歴史と文化のまちづくり懇談会」が平成 22 年より開始され，手塚治虫が住んでいたことのある「並木ハウス・アネックス」に「雑司ヶ谷案内処」を設置し，観光案内の拠点とすると同時に，ボランティアガイドの拠点としても活用されている。このような熱心な活動もあることを受けて，平成 23 年度には，鬼子母神通り商店街の路面舗装改修の際に，文化財にも指定されている鬼子母神のケヤキ並木のある参道の石畳に似せた路面になるような工夫が施された。実験的な取り組みではあるが，近隣住民・町会等との相談の上で整備がされた。

雑司ヶ谷 1 丁目でも文化人などの居住した住まい等を，保存し活用するに値する建物に対する運動も見られる。その先駆けは宣教師館であろう。ひっそりと住宅地にたたずむ文化財であると同時に，朗読会を行う住民がある等地域の住民に使われるコミュニティの場でもある。

雑司ヶ谷は行政主導の大規模な都市基盤整備は遅く，防災対策は万全とは言えないものの，住民による活動が展開し，居住地としての質を向上させている地区である。

2.2　インナーリンク構想の実現

1）防災を意識した都市整備事業の概略

この地域の災害に備えたまちづくりのきっかけとなるのは，昭和 54 年に豊島区の広域避難所が指定され，この地域の住民は避難をするなら 10 km 程も離れた光が丘に避難をすることが求められるようになったことにある。その点に疑問を持つ住民がいたことや，行政も安全性を高めるために南池袋で防火地域の指定準備を始めたことが，現在にも続く防災まちづくり事業の端緒である。これを機にどのようなことが地域で話し合われているのかを知らせるための「街づくり新聞」が昭和 57 年に刊行され，約 30 年にわたって情報を地域に提供し続けてきた。そういった住民への広報を行いながらの防災まちづくり活動は現在も続いている。

雑司ヶ谷地域を対象とした防災関連事業を図 2 に整理する。まち全体の防災力を高めるために，昭和 57 年頃より，防災のための整備が行われるようになり，これまでに，「雑司ヶ谷墓地周辺地区都市防災不燃化促進事業」（S59 ～ H15），「東通り拡幅事業」（S62 ～ H9），「池袋南地区防災生活圏促進事業」（H11 ～ H21）が防災促進の事業として導入された。これらは，道路の拡幅に優先的に取り組み，不燃化への建て替え助成，或は公園等を優先的に整備等をする，災害への安全性を高めるための事業である。また平成 10 年からは，「環状 5 の 1 号線沿道地区計画」の取り組みが始まり，都電荒川線に沿うようにして新たな広幅員道路がつくられ，それに伴い地区計画で地域の整備を進めた。

現在は，月 1 回開催される「池袋南地区まちづくりの会」に，雑司ヶ谷 1 ～ 3 丁目及び南池袋地域の町内会長や住民有志が参加しながら，防災を意識したまちづくりについて勉強したり，防災計画づくりに取り組んでいる。

2）インナーリンク構想の提案

雑司ヶ谷地域で実質的な地域をあげての防災への取り組み提案の先駆けとなった「雑司ヶ谷墓地周辺地区都市防災不燃化促進事業」は，昭和 57 年に，豊島区からの委託事業（不燃化促進事業調査）とし

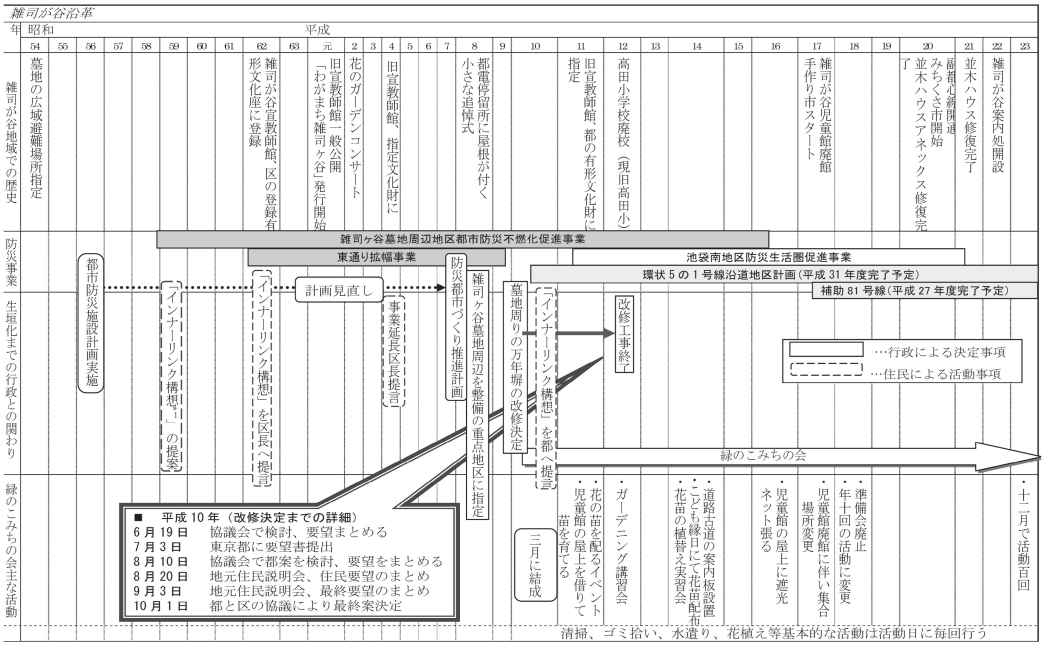


図 2　雑司ヶ谷の防災まちづくりにかんする略歴

て取り組まれた調査の成果に基づいて始まった。雑司ヶ谷地域周辺の住宅への不燃化を支援するとともに，雑司ヶ谷霊園を安全な場所となるよう整備することが主な内容である。遠くまで避難するのではなく，そもそも地域の防災性を高めることが大切という考え方のもとに専門家による実態調査と，提案が行われた。

その中で特に注目されたのが，雑司ヶ谷の霊園である。木造密集市街地内にありながら，建物が殆ど立たない雑司ヶ谷霊園は，貴重な空間である。避難場所としての安全性を高め，雑司ヶ谷の住民を守る拠点の一つとなるための取り組みが始まる。この提案は，インナーリンク構想と呼ばれ，昭和 59 年から施行された「雑司ヶ谷墓地周辺地区都市防災不燃化促進事業」では，住民との協議会形式で計画の検討を進めた。インナーリンク構想を具体化し，区及び都に対して住民からの提案という形で提出され，昭和 62 年に正式に区は受け取った。雑司ヶ谷霊園の所有者でもある東京都がこの構想を受け取り，対応を始めたのは平成 10 年のことであった。

インナーリンク構想の具体的な内容を図 3 に示す。雑司ヶ谷周辺の大街路の内側にある木造密集住宅地域の内側に，どこからもアクセスのできる避難に適した場所と，更に町の外に逃げることができ，また延焼遮断の役割を果たすことになる道路の整備を行うことを提案するものである。具体的には雑司ヶ谷墓地周辺道路を整備し，避難路として活用できるようにすること，さらに万年塀（コンクリート塀）を生垣にし，震災時の安全性と防犯性を高める改善である。

このような計画に基づいて，雑司ヶ谷霊園を地域の広域避難場所として指定し，墓所としての役割以外に防災機能を担う場所として，その環境を保持していくこととなった。霊園周辺は木造住宅密集地域としての安全性を高めるための建物不燃化への助成が行われた。更に，以前は霊園周辺が万年塀に囲まれていたものを，生垣・フェンス化への改修が図られた。生垣を採用するにあたっては，コンクリート製の塀（万年塀）に比して日常的な手入れが必要になることが，自治体が管理しなくてはならない場所としては問題となる。そこで住民は，手入れは住民自身で行うことを前提に提案を行った。

当初この提案は墓地を管理する東京都には受けいれられなかった。しかし阪神淡路大震災を契機に東

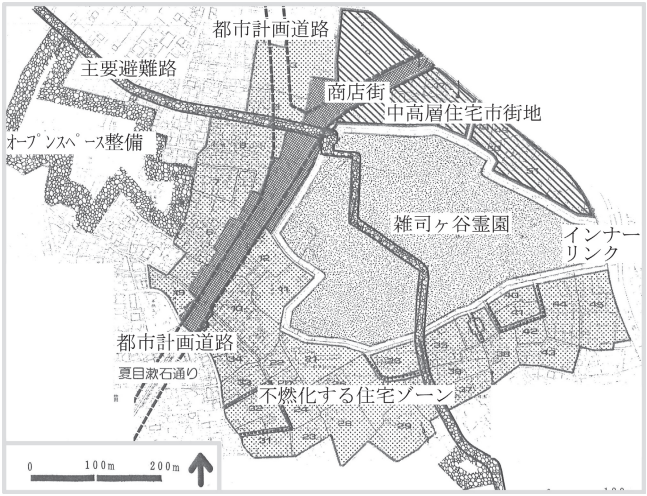


図 3　雑司ヶ谷のインナーリンク構想*[3]

京都では防災都市づくり推進計画が進められ，平成 8 年には，雑司ヶ谷墓地周辺地区が整備の重点地区に指定された。このように都の防災対策を重視することとなったことを受けて，雑司ヶ谷地域の整備も注目される。

平成 10 年に漸く万年塀の改修に取り組むことが決まり，改めてインナーリンク構想を住民は，都に提案した。その際住民から出された主な内容と，都の考え方の提示を対比したものが表 1 である。住民の提案は外周全体に散策路と生垣を確保したいと言う趣旨であったが，東京都としては動かさなくてはいけない墓地の出ない範囲で善処するという方針であったことが読み取れる。住民がこのような生垣化にこだわった背景には，幾つかの理由がある。目的として記述されている通り，住民は，防災上の安全だけではなく，防犯上の安全性を高めたいと考えていた。万年塀の震災の際の転倒の危険性は周知のとおりであり，阪神淡路大震災を受けての防災性向上の視点からもその点が重要である。しかし日常生活をこの地域で送る住民にとっては，万年塀で視界が墓の中と外とでさえぎられることにより発生する防犯上の問題も非常に大きかった。生垣にすることは，景観の改善も含め，日常的な住環境を向上させるために重要な視点であった。また生垣にすることによって発生する緑の手入れは地元住民が行うことが条件となって東京都の合意に達した*[4]。協議を重ねたからこそ実現したことと言えよう。

表 1　雑司ヶ谷霊園の塀にかかわる住民と都の提案*[4]

協議会の提案	東京都による提案
＜基本構想＞ 墓地周りの万年塀を取り払い，墓地の外周部に舗道を設置し，緑豊かな散策路にする。狭い場所は境界近くの区画を空き墓所と換地。 ＜目的＞ ①避難しやすい墓地づくり ②安心して歩けるみちづくり ③夜も安心な墓地 ④うるおいのあるまちづくり ⑤消防車の入れる道づくり	①万年塀を撤去し，生垣を中心として整備 ②生垣が難しい狭い場所にはフェンスを設置し蔦を這わせる。 ③セットバックはせずに，万年塀の場所に設置する。 ④墓地北側の万年塀と墓石の間にスペースある場所は，セットバック又は園内通路を歩行者路として兼用する。 ⑤整備後の生垣の管理は区で対応する。

改修は平成 10 年から 12 年の 3 か年にかけて行われた。墓地の南側，北東側，そして西側の順で進められ，万年塀の生垣化を実施するだけでなく，入口を増やし，舗道を整えること，また雨水の排水の悪かった場所を改修する等の改善も行った。コンクリートの板壁が並ぶよりも，気持ちよく暮らせる環境が創られた。

3. 住民による管理状況

3.1　運営体制

完成した生垣の手入れは，管理者である都から区に依頼され，更に区は住民との協力体制の中で実施をすることとなっていた。区は雑司が谷防災緑道支

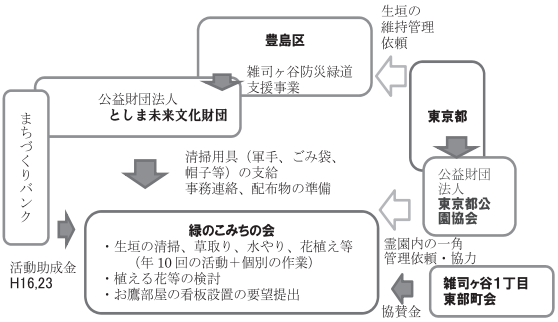


図 4　緑のこみちの会の活動への支援体制

写真 1　生垣周辺の手入れをする住民

援事業として，外郭団体である街づくり公社に住民との作業を委託している。住民有志による組織である「緑のこみちの会」は，定期的な手入れ，清掃，また花を植える活動等を行っている。住民の自発的な緑の管理活動ではあるものの，区との連携の中で成立していた協議会であること，また区の予算を使いながら進めること等一般的な公園とは異なる特徴を持つ。組織間の役割分担を図 4 に示す（写真 1 参照）。

区は外郭団体である「としま未来文化財団」（平成 16 年までは，財団法人豊島区街づくり公社）と連携しながら行っている。生垣の管理をするための用具等の提供は，この財団より受ける。事務連絡等も，としま未来文化財団を通して行われ，住民と行政との連携活動という点における要となっている。

更に，近隣町会からの協賛金を平成 16 年より提供を受けて運営されている。もともと町内会をベースにした有志でまちづくり協議会が結成された経緯もあり，町内会を軸にして「緑のこみちの会」への参加者の呼びかけがあったという。町会との協力的な関係が築かれている。

平成 16 年と平成 23 年には，豊島区のまちづくりバンクからの助成金も受け取っている。自由に利用できる財源があることで，活動の幅が広がり，後述する「ぺんぺん草の会」のような展開が見られた。平成 12 年度には，セブンイレブン記念財団による助成金も得るなど，積極的に活動を展開している。

3.2　活動成果とその拡がり

1）定期的な生垣整備活動

平成 11 年度より活動を始めたこの会は，定期的に生垣周辺の植込みの整備等を行ってきた。ごみや雑草をとるような清掃活動は必ず毎回行われ，更に植え込みに花を植える等のより美しくするための活動が年に数回行われてきた。全員での活動回数は，当初は年間約 6 回の活動を行っていた。平成 18 年より 10 回以上となっている。しかしそのための準備を中心的なメンバーで，別途行ってきたとの報告がある＊[5]。

活動内容は，清掃及び花の苗を植える活動は随時行ってきているが，それ以外にも様々な活動を行ってきている。平成 12 年からは参加者の希望により，腐葉土づくりも開始した。土づくりは緑の管理の基本であり，より良い花を咲かせようという参加者の長期を見据えて緑の環境を豊かにしたいという気持ちの表れであると言えよう。

2）地域住民への拡がり

会の活動は霊園の中の整備に留まらない。地域の餅つき大会へ参加し，同時に近隣の住民に花の苗を配布したこともある。パンジー等を種から育て，苗を霊園内に植えるだけでなく，まちの各所で花を咲かせれば，それは住環境全体を良くすることに繋がる。花の苗を育てる作業は平成 12 年度から 17 年度にかけて，霊園近くにあった雑司ヶ谷児童館の屋上を借りて行われていた。花の苗を育てる作業は，日常的にまめに管理をしないと成功しないが，児童館の屋上には自由に出入りすることができたので，苗の育成に成功をした。また苗を配布するにあたっては，ポットに入れたり，配布のためのチラシを作成・ポスティングをしたりと，様々な活動が付随する。雑司ヶ谷霊園の生垣の手入れのために集まった人々であるが，地域全体を改善する活動が展開されていた。

この児童館は平成 17 年度をもって閉鎖され建て

替えられた。現在保育園があるが，自由に出入りをし，苗を育てられる場所は無く，苗の配布活動はこれ以降行われていない。しかし住環境を良くしたいという住民の自発的な活動は，一定期間地域の多くの人に関心を拡げるきっかけを作ったと言えよう。

またガーデニング講習会を平成 13 年～ 14 年度にかけて開催した。直接生垣の手入れを行うためのものではない。個人の庭に応用するような内容であり，これを通して個人の庭の手入れが良くなれば雑司ヶ谷全体に波及したものとも言える。花を楽しむ活動の裾野を地域に広げてきていきたいという気持ちを持つ住民がこみちの会を通してつながり，地域全体の緑の環境改善に寄与していると言えよう。

3）派生的な活動

平成 14 年に，地域住民からの提案で，ここのかつて御鷹部屋があり，昔からの道であることを示す看板を設置することが実現した。

平成 16 年には，本会から派生的に有志でつくった「ぺんぺん草の会」が結成された。霊園内に自然に生えてくる小さな花などを知りたいという気持ちから，皆で調べそれを冊子にして地域の本屋で販売する活動を始めた。まちづくりバンクから，そのための費用を受けることができたものでもある。一度は冊子を出し好評だった。しかし野草なので毎年同じ場所で花が咲くわけではなく，その頃から霊園内の草刈りが鎌を使った手での草刈りから，電動の草刈り機が使われるようになったこともあり，野草が花が咲く前に刈り取られるようになってしまったこと等から，活動されなくなった。

住民はその時々に可能なことを，様々な形で派生的に行っていることが確かめられた。このような楽しい派生的な活動があったから，活動内容の変化と，自発的に活動をする楽しさを味わうことができ，雑司ヶ谷霊園周囲の生垣整備作業を継続的に行う背景にあったことが推察される。

4. 継続的な活動意欲を高める背景

4.1 活動参加の契機

現在実質的に活動に参加しているという 20 人程のメンバーに，2012 年 12 月に「緑のこみちの会」を通してアンケートを配布・回収していただいた。回収されたアンケートは 23 票で，本章ではこの結果を中心に，継続的な緑の維持活動への参加について，その背景にあるものを整理する。

表 2　参加者の年齢と参加年度と年齢の割合

参加年度	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	不明	計	合計
20代											1				1	6
30代															0	
40代										1					1	
50代								1		2			1		4	
60代	1								1		1				3	16
70代	4			1	1	1								2	9	
80代	1	2										1			4	
不明	1														1	
計	7	2	0	1	1	1	0	1	1	3	2	1	1	2	23	

表 2 は，現在の年齢と活動開始時期を整理したものである。活動初期から参加している人は，60 歳代以上の高齢者が中心である。活動開始当時は町内会を通して声をかけられた人等 70 名ほどが参加していたとのことであるが，最近実質的に参加しているのは 20 名という。20 名のうち活動開始当初から参加している人は半数以下であり，近年では比較的若い世代の人も参加するようになっている。平成 18 年度以降に参加し始めた人は，年齢層の幅が広く，緑に関心のある幅広い層が加わることができていると言える。全体の年齢層は高齢者が多いものの，毎年新たな参加者がいて，継続的な活動の基礎ともなっている。

この活動の開始当初は 70 名程が定期的に参加していたとのことであるが，現在は 20 名程度までに減ってしまった。当初は町内会を通して参加の依頼があり，半ば義務的に参加していた人もいると考えられる。現在の 20 名という数は，係りたいという気持ちを自発的に持つことのできている人の数字であると言えよう。特に参加資格を決めているわけではないので，口コミで広がっているようである。

参加する目的についての回答を，表 3 に示す。植物が好きであること，地域のまちづくりのためになることがしたいという気持ち，或はコミュニケーションをとりたいといった，近隣との交流と地域の改善を望むことが背景にいる人が約半数ずつを占める。

また図 5 に示す通り，回答者 23 名のうち 15 名が，一年の 10 回の活動に 7 回以上参加していると回答している。決して総数が多いわけではないが，熱心な参加者の多い活動であると言えよう。その背景には，参加する前よりも植物の種類や育て方につ

表 3　参加の目的

n = 23

霊園の万年塀が生垣化になる時からかかわっていたので	7
植物が好きだから	10
地域のまちづくりのために	11
地域の人とのコミュニケーションのため	13
親や友人に誘われたから	6
防災のため	2
その他	4

複数回答による集計

図 5　活動参加回数

いての知識が増えたという人が 18 人と大半を占めていることも理由の一つであろう。参加することにより，自分自身の知識が豊かになる，またコミュニケーションをとる機会が増えることを楽しみにし，それが地域のためになるという達成感等が背景にあるものと推察される。

自由記述の回答の中には，月に 1 回というペースが参加しやすいと感じている人も，自由回答の記述の中に数件見られる。当日が雨で中止になるかもしれないような天気の時でも，念のために集合場所に確認しにいくのだという，とても楽しみにしている人もいる。

4.2　防災にかんする意識

そもそもこの活動は，防災まちづくり活動の一環として始まったものである。その点についての認識を参加者がどのように持っているのかを確かめた。霊園が広域避難場所であることを 23 人中 21 人が知っていて，詳しく知っているとアンケートで回答をした人は 15 人である。またその避難場所の意味も 19 人の人が知っていると回答しており，参加している殆どの人が，雑司ヶ谷霊園の，避難場所としての重要性を意識している。

避難訓練に，ほぼ毎回参加している人が 10 名，時々参加する人が 8 名と，参加したことのないと回答した 4 名に比べてはるかに多く，地域の災害への関心もあることが窺われる。

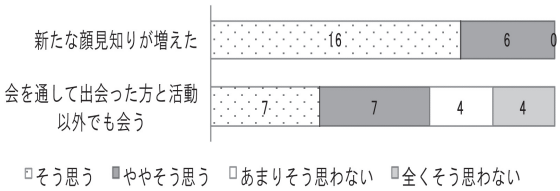


図 6　会を通しての交流派生

4.3　コミュニケーションの深まり

まちづくり活動では，近隣との交流を通した問題共有・問題解決が基本となる。ここでは「緑のこみちの会」の活動を通して近隣とのコミュニケーションが深まったのかを確かめた（図 6）。新たな顔見知りの人が増えたと言う人が 23 人中 16 人と 3 分の 2 を占める。知り合い同士の仲間内活動ではなく，新たな人間関係を創り出していると言える。

また，この会を通して出会った人と，それ以外の場所でも会うことがあるかという質問に対しては 14 名が肯定的な回答であった。約半数の人が，こみちの会以外でも同じ人と顔を合わせることがあり，多角的な交流の機会を持ち得ていることが確かめられる。

居住年数を確かめたところ，20 年以上住んでいる人が 16 名と多数であるものの，5 年以内の人も 4 名いることがわかった。新たな居住者が活動に参加してコミュニティ内でのネットワークを築く機会となっていることが確かめられる。

またアンケートの自由記述欄には，この会に参加することで，雑司ヶ谷の歴史のこと等の地域の詳しいことをお喋りしながら知ることができて楽しいといった記述がみられる。単に緑の手入れをするというだけではなく，古くから住む人と，新たに住む人とが繋がり，地域への関心を深める場ともなっている。

4.4　住環境への個別の意識

次にこみちの会の活動に参加することによる住環境改善への意欲を，自宅でも自ら植物を育てているかどうかという点から確かめる。これは雑司ヶ谷における住環境を印象づけるものとして狭小敷地が多いにも係らず，緑の表出が多いと言われることがある点も背景にある。23 人中 18 人の人が植物の知識について深まったと指摘している。植物は知識が増えることで，育てられる植物が増える。また育てる

楽しみが深まるものである。植物についての知識が増えることは，植物を育てる楽しみが増えたということでもある。こういった知識が増えたりすることで，得られるものがあることが継続的な活動に繋がったとも言えよう。

また，従前は植物を育てていなかった人でも 7 名が新たに育てたり，この会を通して種から植物を育てるようになったりと，植物に対するかかわりが積極的になった人もいる。「緑のこみちの会」は，霊園の緑を手入れする団体というだけでなく，そこを通して雑司ヶ谷に住む各人が，地域の緑が増えることに貢献するきっかけを提供しているとも言える。

5. おわりに

雑司ヶ谷は木造密集市街地としての整備を，現状の雰囲気を残したまま何とか解決したいと多くの住民が願っている地域である。木造密集市街地の防災対策については，対応がより困難な地域が今でも未解決地区として残っているものと考えられる。雑司ヶ谷らしさを残しながら，より安全で暮らしやすい改善が望まれている地域である。雑司ヶ谷霊園の生垣整備はその典型的な良い成果の一つであろう。万年塀を生垣にすることで避難場所の選択肢を増やしたと同時に，緑を増やして環境改善し，防犯性も高めた。

本稿では，雑司ヶ谷の防災事業を通して形成された空間を，近隣住民が継続的に維持していることが確かめられた。参加人数が多いわけではないが，新しい居住者層，若年層が仲間に入りながら，継続的な活動が展開していることが確かめられた。またこの活動では，機会あるごとに，花苗を児童館で育て，ぺんぺん草の会を結成して植物調査を行う等，単なる生垣等の手入れに留まらず，集まった人の興味・関心の持てることを可能な範囲を行ってきた。それは単に空間としての安全性を高めただけではなく，一部の住民とはいえ，住民同士の絆を深める機会を，維持管理という側面から実現している。折に触れそういった活動が展開していることが，この活動が長続きし，また新たな人が活動を楽しむ機会となっているのかもしれない。

註

＊1　株式会社エコライン代表取締役　小野加瑞輝氏。雑司ヶ谷地域の一連の整備について都市防災研究所からの委託調査として，最初はかかわっていた。その後独立してからも，継続的に支援を行っている。

＊2　参考文献 2）3）4）より作成。

＊3　参考文献 5）より抜粋。

＊4　参考文献 4）より作成。

＊5　専門家小野氏へのインタビューより。

＊6　活動内容については，役員及び財団担当者の所持していた記録メモより確認をして整理した内容である。

参考文献

1）戸松昌訓正訂：江戸名所図会　嘉永新鐫　雑司ヶ谷音羽繪圖，金鱗堂

2）一万分一地形圖東京近傍二十六號（共五十二面），大日本帝國測量部，柏書房（1939）（復刻版）

3）戦災焼失區域表示帝都近傍図（1：40,000），日本地圖株式會社（1946）（復刻版）

4）豊島区ホームページ資料より（http://www.city.toshima.lg.jp/dbps_data/_material_/_files/000/000/006/517/20120401-5.jpg）

5）豊島区雑司が谷墓地周辺地区都市防災不燃化促進事業計画調査，昭和 57 年 3 月，豊島区・財団法人都市防災研究所

6）豊島区雑司が谷墓地周辺防災不燃化に関する調査，昭和 58 年 3 月，豊島区・財団法人都市防災研究所

7）中島敏博，田代順孝，古谷勝則：都市近郊住民の利用および保全参加しやすい緑地と生活圏の距離，ランドスケープ研究，**70**, No. 5（2007）

8）岩村高治，横張真：公園計画策定時における住民参加がその後の公園管理運営活動に与える影響，ランドスケープ研究，**65**, No. 5（2001）